

「藤野先生」 魯迅



(1)

東京也無非是這樣。上野的櫻花爛漫的時節、望去確也像緋紅的輕雲、但花下也欠不了成群結隊的“清国留学生”的速成班、頭頂上盤着大辮子、頂得學生制帽的頂上高高聳起、形成一座富士山。也有解散辮子、盤得平的、徐下帽來、油光可鑑、宛如子姑娘的發髻一般、還要將（月＋字）子拗幾拗。實在標致極了。

中国留学生會館的門房里、有幾本書買、有時還值得去一轉：儼在上午、里面的幾間洋房里倒也還可以坐坐的。但到傍晚、有一間的地板常不免要丁丁地響得震天、兼以滿房烟塵斗亂：問問精通時事的人、答道、“那是在學跳舞。”

東京もこんなものに過ぎないのだ。上野の桜が満開の季節に、見渡すと、なるほど花くれないの霞たなびくようだ、花に下につきものの、群れだって行く「清国留学生」の速成科がいた。頭のテッペンに長いペンハツを、とぐろに巻いているので、制帽のてっぺんが突き上げられて、聳え立ち、富士山の一つできあがりだ。

辮をほどいて、べったり撫で付けて付けている者もいるが、帽子をとると、顔にも映すんかばかりにピカピカさながら乙女の髻物にも似たりで、おまけにクネクネ首をくねらせる。まことになめまかしいかぎりである。中国留学生會館の取附

きの部屋では、なにがしかの書籍が入手できるので、ときには一巡りだけのことはあった。午前中なら、奥の方のいくつかの洋間は、一休みするには、さほど悪くは無かった。だが夕刻になると、そのうちの一室の床板がしょつちゅうドスンドスンと大音響を響かせ、さらには部屋中に濛濛たる塵が舞いあがるのだ。消息に精通している男に尋ねると、「ダンスのレッスンだよ」と答える。

(2)

到別的地方去看看、如何？

我就住仙台的医学専門学校去。從東京出發、不久便到一处駅、写道：日暮里。不知怎地、我到現在還記得還名目。其次却記得水戸了、還是明的遺民朱舜水先生客死的地方。仙台是一个市鎮、并不大；冬天冷得利害；還沒有中国的學生。

大概是物以希為貴罷。北京的白菜運往浙江省、使用紅頭繩系住菜根、倒挂在水果店頭、尊以“膠菜”；福建省野生着的蘆薈、一到北京就請進溫室、且美其名曰“龍舌蘭”。我到仙台也頗受了這樣的優待、不但學校不收學費、幾個職員還為我的食宿操心。

よそへ行つては、どうだろうか？

そこで私は仙台的医学専門学校へ行くことにした。東京を發つと、間もなく一つの駅に着いた。日暮里と書いてあった。どういうわけか、いまなお、その名を覚えてゐる。そのあとは、もう水戸しか覚えてゐない。明の遺民朱舜水先生が客死された地である。仙台は、まちはまちだが、さして大きくない。冬は寒さが厳しかった。まだ中国人の學生はいなかった。

おそらく物は稀なるを以て貴しとなす、というわけであろう。北京の白菜が浙江省に運ばれると、赤い紐で根っこを

ゆわえられて、くだもの屋の店頭で、さかさまにつるされ、「膠菜」とやら言って、あがめられる。福建省に野生している「蘆薈」は、北京に着くと直ちに温室に迎え奉り、そのうえ仰々しくも「龍舌蘭」と申し上げる。私も仙台に来て、大いにこのたぐいの優遇を受けた。学校は授業料を免除してくれたばかりか、何人かの教職員が私の食事や下宿のことまで心をくだいてくれた。

(3)

我先是住在監獄旁邊一個客店里的、初冬已經頗冷、蚊子却還多、后來用被盖了全身、用衣服包了頭臉、只留兩個鼻孔出氣。在這呼吸不息的地方、蚊子竟無從插嘴、居然睡安穩了。飯食也不壞。但一位先生却以為這客店也包辦囚人的飯食、我住在那里不相宜、幾次三番、幾次三番地說。我雖然覺得客店兼辦囚人的飯食和我不相干、然而好意難却、也只得別尋相宜的住处了。于是搬到別一家、里監獄也很遠、可惜每天總要喝難以下咽的芋梗湯。

はじめ私は監獄のそばにある下宿屋に住んだ。初冬だと言うのに、もう随分と寒い。そのうえ蚊がたくさんいる。そのうち蒲団をすっぽりがぶり、服で頭と顔をくるんで、鼻の穴だけを出し息をすることにした。息が出たり入ったり絶え間ない場所では、蚊もついに横合いから口を入れるすべが無く、意外にも落ち着いて眠れた。食事もなかなかよかった。

ところが或る先生が、その下宿が囚人のまかないも請け負っていることから、私がそこに下宿することは、適切でないと考え、それを繰り返して繰り返して、お説になる。下宿屋が囚人の、まかないを兼業していたって、私は関係は無いと思ったが、好意をムゲに断れず、他に適切な住みかを探すほかなかった。かくて別の家に引っこした。監獄からは遠ざかったが、来る日も来る日も、どうにも呑み越

せない芋ずる入りの味噌汁を飲ばねば、ならぬことになったのは無念だった。

(4)

從此就看見許多陌生的先生。聽到許多新鮮的講義。解剖学は兩個教授分任的。最初は骨学。其時進來的是一個黒瘦の先生、八字須、戴着眼鏡、挟着一疊大大小小的書。一將書放在講臺上、便用了緩慢而很有頓挫的聲調。向學生介紹自己道：“我就是叫作藤野嚴九郎的……。”

后面有幾個人笑起來了。他接着便講述解剖学在日本發達的歷史、那些大大小小的書、便是從最初到現今關於還一門學問的著作。起初有幾本是線裝的；還有翻刻中國訳本的、他們的翻譯和研究新的醫學并不比中國早。那坐在后面發笑的是上學年不及格的留級學生、在校已經一年、掌故頗為熟悉的了。他們便給新生講演每個教授的歷史。

以来、多くの見知らぬ先生に出会い、多くの新しい講義を聞くことができた。解剖学は二人の教授が分担した。最初は骨学である。その時入って来たのは痩せた色の黒い先生で、八字ひげに、眼鏡をかけ、大小さまざまな書物を重ねて脇に抱えていた。書物を置くなり、ゆっくり区切り区切り、学生に向かって自己紹介をして言った。「私は藤野嚴九郎という者であります……。」

後の方の数人が笑い声をあげた。彼はつづいて解剖学の日本における発展の歴史の講義をした。大小さまざまな書籍は、初期から今日までに至るまでの、この分野の学問に関する著作だったのである。はじめの何冊かは糸綴じのものである。中国の訳書を翻刻したものもある。彼らの新しい医学の翻訳と研究は、中国より別に早くはなかったのだ。うしろに陣

取って笑い声を上げた連中は、前年度に合格しなかった落第生で、学校にはすでに一年いたので、裏話には甚だ明るくなっている。彼等は新入生に、一人一人の教授についての逸話を語り聞かせてくれた。

(5)

還藤野先生据說是穿衣服太模糊了。有時竟會忘記帶領結；冬天是一件旧外套、寒顛顛的、有一回上火車去、致使管車的疑心他是（才+八）手[三只手]、叫車里的客人大家小心些。他們的話大概是真的、我就親見他有一次上講堂沒有帶領結。過了一星期、大約是星期六、他使助手來叫了。到得研究室、見他坐人骨和許多单独的頭骨中間、——他其時正在研究着頭骨、后來一篇論文在本校的雜誌上發表出來。

“我的講義、爾能抄下來？” 他問。

“可以抄一点。”

“拿來我看！”

この藤野先生は、なんでも身なりにはよほど無頓着で、時には蝶ネクタイを忘れてくる事があるそうだ。冬は一張羅の古びたオーバーげ寒そうにしているので、或る時など汽車に乗ったら、車掌がスリかと怪しみ、車内の客に用心をうながしたことがという。彼らの話はたぶん本当であったのであろう。一度先生が蝶ネクタイなしで教室に現われたのを現に私が、この目で見たことがある。一週間が過ぎ、たぶん土曜日だったろう、彼は助手をよこして私を呼んだ。研究室に行ったところ、人骨とたくさんの頭蓋骨のまん中に坐っている彼が目にとびこんだ。——その頃彼は頭蓋骨を研究中で、のちに一篇の論文にまとめ上げて本校の雑誌に発表された。

「私の講義は、聞き取れるかね？」 彼はたずねた。

「少し聞きとれます」

「持ってきて見せ給え！」

(6)

我交出所抄的講義去、他收下了、第二天便改還我、并且說、此后每一星期要送他看一回。我拿下來打開看時、很吃了一驚、同時也感到一種不安和感激。原來我的講義已經從頭到尾、都用紅筆添改過了、不但增加了許多脫漏的地方、連文法的錯誤、也都一一訂正。這樣一直繼續到教完了他所担任的功課；骨学、血管学、神經学。可惜我那時太不用功、有時也很任性。還記得有一回藤野先生将我呼到他的研究室里去、翻出我那講義上的一個圖來、是下臂的血管、指着、向我和藹的說道：

“爾看、爾將還條血管移了一点位置了。

——自然還樣一移、的確比較的好看些、然而解剖圖 不是美術、實物是那樣的、我們没法改換它。現在我田給爾改好了、以后爾要照着黑板上那樣的画”

私が筆記したノートを差し出すと、彼は受け取り、二、三日して返してくれた。そして、これからは一週間に一度持ってきて見せるようにと言った。持ち帰って開いて見て、私は非常に驚いた。同時に一種の不安と感激におそわれた。私のノートとは始めから終わりまで、すっかり朱筆で添削してあるではなか。多くの脱けた箇所が書き加えてあるばかりか、文法上の誤りまで一つ一つ訂正してあったのである。これは彼が担当している学科の骨学、血管学、神経学が終わるまでずっとつづいたのである。

残念ながら当時わたしは甚だ不勉強で、時として、我が儘でもあった。今でも覚えているが、ある時藤野先生は私を彼の

研究室に呼び出し、私のノートをめくって一つの図を出した。それは下脈の血管であったが、それを指し示しながら、やさしく私に言った。

「ねえ君、君はこの血管の位置を少し移動させたね。——そりゃあ、こう移してやると、たしかに、いくらか見た目にはいい、だが解剖図は絵画じゃないんだよ。実物がそうなっているものを、我われが換えるわけにはいかないんだよ。いまちゃんと直してあげたから、これからは黒板に書いてあるとおりに写し給え」

(7)

但是我還不服氣、口頭答應着、心里却想道：

“図還是我画的不錯；至于实在的情形、我心里自然記得的。”学年試験完卒之后、我便到東京玩了一夏天、秋初再回学校、成績早已發表了、同学一百余人之中、不過是没有落第。這回藤野先生所担任的功課、是解剖實習和局部解剖学。解剖實習了大概一星期、他又叫我去、很高興地仍用了極有抑揚的声調對我說道：

“我因為聽說中国人是很敬重鬼的、所以担心、怕爾不肯解剖尸体。現在從算放心了、沒有這回事。”

しかし私はやはり承服しなかった。口では同意したものの、心の中でこう考えていた。「図はやっぱりボクのほうがうまいや。實際の様子は、むろん頭の中に叩き込んであります」学年試験が終わり、私は東京に行って一夏遊んだ。秋の始めに学校に戻って来た時には、とっくに成績が発表してあった。同級生百人あまりの中で、私は真ん中へん、落第しなかったというだけのことだった。次ぎの藤野先生が担当する学科は解剖實習と局

部解剖学である。解剖實習をして、およそ一週間目のころ、彼は又、私を呼び寄せて、上機嫌で、例の抑揚のひどい口調で言った。

「私は中国人は靈魂を非常に敬うと聞いていたんで、心配したが、君が屍体の解剖を嫌がりはしないかとね。これで先ずは安心したよ、そんなことがなくてね」

(8)

但他也偶有使我很為難的時候。他聽說中国的女人是裹脚的、但不知道詳細、所以要問我怎樣裹法、足骨變成怎樣的畸形、還嘆息道：“總要看一看才知道。究竟是怎樣一回事？”

有一天、本級学生会幹事到我寓里來了、要借我的講義看。我檢出來交給他們、却只翻檢了一通、並沒有帶走。但他們一走、郵差就送到一封很厚的信、拆開看時、第一句是：

“爾改悔罷！”

這是《新約》上的句子罷、但托爾斯泰新近引用過的。其時正值日俄戰爭、托老先生便寫了一封給俄國和日本的皇帝的信。開首便是這一句。日本報道上很斥責他的不遜愛國青年也憤然然而暗地里却愛了他的影響了。

だが彼もたまに私を困惑させることがあった。彼は中国の女性は纏足すると聞き知っていたが、詳しいことは解からない。そこで、どういうくるみ方をするのか、足の骨はどのような畸形になるのかを私から聞き出そうとするのだ。その上、嘆息まじりに言うのである。

「やっぱり見てみないことにはな。一体どういうことになっているんだろう？」

ある日、学級の学生会の幹事が私の下宿にやって来て、ノートを貸してほしいと言った。取り出して彼等に渡してやったが、パラパラとめくって見ただけで、

持ち帰ろうとはしなかった。ところで彼等が引き揚げると、郵便屋が分厚い封書を届けてきた。封を切って見ると書き出しはこうだ。

「汝悔い改めよ！」

これは『新約聖書』に出て来る文句であろうが、最近トルストイの引用したものだ。時あたかも日露戦争のさなかで、日本の新聞は彼の不遜を強く論難し、愛国青年もいきりたった。ところが裏ではもう彼に影響されてしまっていたのだ。

(9)

其次的話、大略是說上年解剖学、試験的題目、是藤野先生在上講義做了記号、我預先知道的、所以能有這樣的成績。末尾是匿名。

我還才回憶到前幾天的一件事。因為要開同級會、幹事便在黑板上写廣告、末一句是“請全數到會勿漏為要”而且在『漏』字傍加了一個圈。我當時雖然覺到圈得可笑、但是毫不介意、還回才悟出那字也在諷刺我了、優言我得了教員漏泄出來的題目。

我便將這事告知了藤野先生、有幾個和我熟識的同學也很不平、一同去詰責幹事托辭檢查的無禮、並且要求他們將檢查的結果、發表出來。終於還流言消滅了、幹事却又竭立運動、要收回那一封匿名信去。決末是我便將這托爾斯式的信退還了他們。

そのあとの文句は、あらましを言うと、前年度の解剖学の試験問題は、藤野先生がノートにしろしをつけておいたので、私はあらかじめ知っていたのだ、だから、このような成績をとることが出来たというのである。文末は匿名であった。私はこれでこの間のあの一件を思い出した。同級会をするというので、幹事が黑板に通知を書いた。終わりの文句は、「全員漏れなく参集されたし」で「漏」

の字のわきに○印が付けてあった。その時その○をおかしいとは思ったが、全然気にとめていなかった。これであの字も私への、あてこすりであったのだと、やっと気がついた。教員が漏らした問題を私が手に入れたと匂わせていたのである。

私はただちにこの件を藤野先生に知らせた。何人かの私と親しい同級生も大いに憤り、私と一緒に行って、幹事が口実を設けて検査する無礼を問責し、あわせて彼等に検査の結果を公表するよう要求した。結局このデマ中傷は立ち消えた。すると今度は幹事は極力奔走して、例の匿名の手紙を取り返そうとした。締めくくりとして私はこのトルストイばりの手紙を彼等に返してやった。

(10)

中国は弱国、所以中国人当然是低能兒、分数在六十分以上、便不是自己的能力了：也無怪他們疑惑。但我接着便有參觀槍斃中國人的命運了。第二年添教黴菌学、細菌的形狀是全用電影來顯示的、一段落已完而還沒有到下課的時候、便影幾片時事的片子、自然都是日本戰勝俄國的情形。但偏有中國人挾在里边：給俄國人做偵探、被日本軍捕獲、要槍斃了、圍着看的

也是一群中國人：在講堂里的還有一個我。

“萬歲！” 他們都拍掌歡呼起來。這種歡呼、是每看一片都有的、但在我、這一声却特別聽得刺耳。此后回到中國來、我看見那些閑看槍斃犯人的人們、他們也何嘗不酒醉似的喝采

—————嗚呼、無法可想！ 但在那時那地、我的意見却變化了。

中国は弱国なるが故に、中国人は当然低能兒ということになる。点数が六十点以上になると、もう自分の力ではなくなる

のだ。彼等が疑いぐるのも無理からぬことだ。ところで、つづいて私は中国人を銃殺するのを見学する運命にめぐり合った。第二学年には細菌学が加わり、細菌の形態はすべて幻灯で示されることになっていた。一区切りついてはまだ講義時間が終了になっていない時には時局の画片を映した。むろん全部日本がロシアと戦って勝利を収めた場面ばかりである。ところが、こともあろうに中国人が、そのなかに紛れ込んで出て来たのだ。ロシア人のために密偵を働いたかどで、日本軍に捕らえられ、いまにも銃殺されようとしている。ぐるりを取り巻いて見物しているのも中国人で、そして教室にもう一人わたしがいた。

「万歳！」彼等はみな手をたたいて喚声をあげた。こういった喚声は一枚ごとにあがるのであったが、しかし私にとっても、犯人が銃殺されるのを暇つぶしに見物する人々を見かけたが、彼等も酒に酔いしれたように喝采するではないか。——ああ、如何ともし難い！しかし、その時、其処で、わたしの考えは変わったのだ。

(11)

到第二学年的終結、我便去尋藤野先生、告訴他我将不学医学、并且離開這仙台。他的臉色彷彿有些悲哀、似乎想說話、但竟沒有說。

『我想去学生物学、先生教給我的學問、也還有用的。』其實我並沒有決意要学生物学、因為看得他有淒然、便說了一個慰安他的詭話。

“為医学而教的解剖学之類、怕于生物学也没有什（ノ＋ム）大援助”他嘆息說將走的前幾天、他叫我到た家里去、交給我一張照相、后來写着兩個字道：“惜別”還說希望將我的也送他。但我這時適值沒有照相了；他便叮囑我將來照了寄給他、并

且時時通信告訴他此後的狀況。

第二學校が終了すると私は藤野先生を訪ね、医学の勉強は止める。そしてこの仙台を去ろうと思っていると申し上げた。先生の顔に悲しげな色がよぎった。何か言おうとしたようだが、しかしとうとう何もおっしゃらなかった。

「わたしは生物学を勉強するつもりです。先生が教えてくださった学問はやはり役に立ちますよ」實の所、私は別に生物学をやろうと決心した、わけではなかったのだが、彼の寂しげな様子を見て、彼を慰める作り話しをつい言ってしまったのだ。

「医学のために教えた解剖学などは、生物学のたすけには、さしてならんのではないか」彼はため息をついて言った。

出發する前日前、彼は私を家に呼び、私に写真を一枚渡された。裏には「惜別」の2字が書かれていた。そして私のもくれるようにおっしゃった。だがその時、折あしく写真はなかった。すると彼は 後日写したら送ってほしい、そして、始終、手紙でその後の様子を知らせるようにと念を押して、おっしゃった。

(12)

我離開仙台之后、就多年沒有照過相、又因為狀況也無聊、說起來無非使他失望、便連信也怕敢寫了。經過的年月一多、話更無從說起、所以雖然有時想写信、却又難以下筆、這樣的一直到現在、竟沒有寄過一封信和一張照片。從他那一面看起來、是一去之后、杳無消息了。

但不知怎地、我總還時時記起他、在我所認為我師之中我感激、給我鼓勵的一個。有時我常常想；他的對於我熱心的希望、不倦的教海、小而言之、是為中國、就是希望中國有新的医学；大而言之、是為藝術、就是倦希望新的医学傳到中國去。他的性格。在我的眼里和心里是偉大的雖然他的姓名並不為許多人所知道。

仙台を去ってから、私は長年写真というものを写したことが無かった。それに状況も面白くなく、知らせたところで失望させるだけのことだろうから、手紙を書くのも気後れがした。歳月が過ぎるにつれ、いよいよ何から切り出してよいか解からなくなる。だから時には手紙を書こうという気持ちになっても、こんどはなかなか書きだせない。こんなわけでこれまでついに一通の手紙も一枚の写真も差し上げたことがない。彼の方から見れば、去ったが最後、杳として音沙汰なしである。

しかし、どういうわけか、私はやはり彼を思い出す。私が師と思いきめた人のなかで、彼はもっとも私を感激させ、私を鼓舞してくれたひとりなのだ。私はよくこう思う、彼の私にかけた熱意に満ちた期待、倦まざる教えは、小にしては、中国のためであり、つまり中国の新しい医学の出現するのを望むことだった。大にしては学術のためであり、つまり新しい医学が中国に傳わることを望むことだ。彼の人柄は、私の眼のなかで、心のなかで、偉大である。彼の名は多くの人に知られていなが。

(13)

他所改正的講義、我曾經訂成三厚本、收藏着的、將作永久的紀念。不幸七年前還居的時候、中途毀壞了一口書箱、失去半箱書、恰巧這講義也遺失在內了。責任運送局去搜尋、寂無回信。只有他的照相至今還挂在我北京寓居的東牆上、書棹對面。

每当夜間疲倦、正想偷懶時、仰面在燈光中瞥見他黑瘦的面貌、似乎正要說出抑揚頓挫的話來、便使我忽又良心發現、而且增加勇氣了、于是点上一枝烟、再繼續写些為『正人君子』之流所深惡痛疾的文字。

十月十二日。

彼が訂正してくれたノートを、私は以前分厚い三冊の本に綴じ、しまっておいた。永久の記念にするつもりであった。不幸なことに七年前転居の際に、途中で本箱を壊されてしまい、本を箱の半分ほど失ってしまった。まずいことに、このノートも紛失した中に入っていたのである。

運送屋に督促して捜させたが、返事は無かった。ただ彼の写真だけは今なお私の北京の住居の東側の壁にかけてある。書きもので机に向かい合っている。夜ごと疲れ怠けたくなるとき、顔をあげて、灯火の中で彼の痩せた浅黒い顔にチラッと目をやると、今にもあの抑揚のきつい口調で話しだすようで、忽ち私は良心を目覚めさせられ、そして勇気を奮い立たせられるのだ。そこで一本タバコに火をつけ、またしても『正人君子』どもの目の仇きにされる文章を書き続けるのである。

十月十二日。

完了



藤野 巖九郎（ふじの げんくろう、1874 年 7 月 1 日 - 1945 年 8 月 11 日）は、日本の医師・教育者。日本留学時代の魯迅の恩師として知られる。